

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K04894

研究課題名（和文）「大工棟梁」を中核とした近世建築生産史の再構築

研究課題名（英文）Reconstruction of the history of early modern architectural production centered around carpentry

研究代表者

山岸 吉弘（YAMAGISHI, Yoshihiro）

日本大学・工学部・講師

研究者番号：40454201

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,300,000円

研究成果の概要（和文）：近世建築生産史の研究は蓄積が多く成果も多岐に渡るが、これまであまり顧みられることのなかった東北地方を対象に、「大工棟梁」による建築生産活動の内容と特質を明らかにさせることが本研究の目的である。福島県を範囲として選定し、大工棟梁の氏名などが記載される棟札を中心に史料を悉皆的に収集し、大工棟梁が生産活動に従事した事実を明らかにさせる。その上で、中世から近世へと移行行く中で、先進的な技術を備えた大工と平民に混じって生活する無名の番匠が地域の造営を担い、他所から移入された技術が蓄積され大工や番匠の技術は向上し、最終的には両者の差異は限りなく縮まり接近したところで近世を迎えるに至る過程を明らかにさせた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学問領域である近世建築生産史における既往研究の蓄積はすでに膨大で、学術的な水準は一定の程度を越えている。特に、近畿地方を中心とした大工の研究は活発で、質・量ともに他を圧倒している。一方で、関東地方や東北地方における研究の状況は近畿地方と異なり、成果も少ない。東西において学術的な偏向があるのは、そもそも建築生産構造が根本的に異なっていることを示唆している。これまでの西国一辺倒の傾向を是正し、「東国における建築生産史とは何か」と問うことは学術的に極めて重要である。

研究成果の概要（英文）：The study of the history of early modern architectural production has accumulated a significant body of research and has yielded a wide range of results. The purpose of this study is to shed light on the nature and characteristics of the architectural production activities carried out by master carpenters in the Tohoku region, an area that has not received much attention until now. Focusing on Fukushima Prefecture, this study will comprehensively collect historical materials, particularly MUNAFUDA that list the names of master carpenters, to clarify the facts about their engagement in production activities.

研究分野：日本建築史

キーワード：建築生産 生産組織 大工棟梁

1. 研究開始当初の背景

本研究の学問領域は、近世建築生産史の範疇に含まれる。当該分野における既往研究の蓄積はすでに膨大で、学術的な水準は一定の程度を越えている。特に、近畿地方を中心とした大工の研究は活発で、質・量ともに他を圧倒している。当地の研究が盛んである要因に、地域に多く遺された古文書群の存在が挙げられる。幕府により建設行政機関として中井役所が設置され、関連する多くの行政文書が作成された。つまり、近畿地方の研究が進展するのには、歴史的な必然性が認められる。

一方で、関東地方や東北地方における研究の状況は近畿地方と異なり、成果も少ない。東西において学術的な偏向があるのは、そもそも建築生産構造が根本的に異なっていることを示唆していよう。従って、近畿地方を中心に築き上げられたこれまで研究成果だけに拠ってはい不十分である。これまでの西国一辺倒の傾向を是正し、「東国における建築生産史とは何か」と問うことは学術的に極めて重要である。

2. 研究の目的

近世建築生産史という学問領域にあって、これまであまり顧みられることのなかった関東地方や東北地方を対象に、「大工棟梁」による建築生産活動の内容と特質を明らかにさせることが本研究の主要な目的である。近畿地方と関東・東北地方は、建築生産にまつわる社会的・経済的・文化的な状況が大きく異なると予想される。大工棟梁の活動内容や存在様態も、東西によってまったく違った様相を呈していたことになろう。関東・東北地方における大工棟梁の実体を解明し、建築生産活動の背景となる地域的な特性を踏まえ、新たな大工棟梁という歴史像の構築を目指す。

3. 研究の方法

本研究の主題は大工棟梁にあり、対象は関東・東北地方の地域である。大工棟梁の存在を把握するために、大工棟梁の職名や氏名などが記載される棟札を中心に史料を収集し、大工棟梁が生産活動に従事した事実を明らかにさせる。対象地域として福島県を範囲として選定し、悉皆的に調査を進め、網羅的に大工棟梁の存在を明らかにさせる。

4. 研究成果

本研究の成果は、主に二つに区分される。一つは、(1) 中世南奥における大工について、一つは、(2) 新出の中世木割書について、である。

(1) 中世南奥における大工の研究では、陸奥国南部(南奥)において、大工による建築生産について考察することを試みた。特に、大工技術が当地にもたらされ、根付き、広がり行くことの軌跡を辿ることが目標となる。

まず飯野八幡宮(いわき市平)の造営と大工に注目した。同社に伝来する「飯野八幡宮文書」には、社殿の造営に関する文書が含まれている。元久元年(1204)・建長5年(1253)・文永6年(1269)に行われた造営に関する記述があり、領内の各村々に負担させていたことを読み取ることができる。また、法用寺(会津美里町雀林)の厨子には正和3年(1314)の棟札が遺されており、「大工・院頭・小工」の体制であったことが判明する。飯野八幡宮及び法用寺厨子の事例から、建築生産の担い手として二種類の人物像を思い描くことができる。一つは木材加工に優れ建築の知識を有する百姓や農民であり、一つは先進的な建築文化に精通した職人であり技術者である。

次に、多数の棟札やその写しが遺されている霊山寺(伊達市霊山町大石倉波)に注目する。内容に疑義はあるものの、「作新三千貫文 大工大和国蔡羅ノ住」という記述より、西国の遠方より大工が来ていたらしいことが窺われる(「蔡羅」は奈良か)。また、明応9年(1500)の棟札写には、「大工」として大橋姓の職人が記録されている。更に、天正12年(1584)の棟札写には、大橋姓が多く連名し、縁戚のある師弟の関係が想定され、一族で技術が相伝されていたようである。つまり、家を単位とした大工組織の形成が認められる。

棟札が遺るのは社寺が一般的であり、明記されるのは特別な「大工」が多く、普通の「番匠」は記録される機会が少ない。一方で、八槻都々古別神社(棚倉町八槻)に遺る天文8年(1539)の経箱には「番匠」の文字があるとともに、個人名が具体的に特定される。また、田村大元神社(三春町山中)にある経櫃蓋に書かれた永禄2年(1559)の銘文には、「並番匠」という言葉が使用されている。更に、天正12年(1584)の千住院(郡山市湖南町福良)では個々の「番匠名」が記載されており、番匠の一人々々が個人として把握されている。

慶長5年(1600)の白鬚明神(二本松市戸沢)にある「番匠大工」という肩書きより、番匠と大工が同化していることが分かる。「番匠の大工」と理解するならば、元来は番匠だが大工のよ

うな位置付けにある、というように解釈することができよう。つまり、番匠の社会的な地位が上昇し、大工に昇華し一体化している。

以上を踏まえ、中世の南奥を対象に主に「大工」と「番匠」の変遷を辿ると見えてくる様態の変化から、当時当地において実現されていたであろう生産力を念頭に、黎明期（凡そ 13～14 世紀）・萌芽期（凡そ 15 世紀）・全盛期（凡そ 16 世紀）に区切って各時代の内容と特徴をまとめた。黎明期は、他所から先進的な生産技術を備えた「大工」が南奥の地に赴き仕事をこなしていた。一方で、平民に混じって生活する無名の「番匠」が地域の造営を担っていた。萌芽期は、前期に続き他所から来る「大工」や域内で暮らす「番匠」に加え、生産技術が特定の場に蓄積され自らのものとする当所の「大工」も確認することが出来るようになる。全盛期は、更に多様な展開が見られ、特に「番匠」の成長が特徴的である。「番匠」の個人名が判明し、無名であった「番匠」が有名の存在となった。ここに至って「大工」と「番匠」の差は実質的に限りなく近づき「番匠大工」としていよいよ両者は同化することとなる。

(2) 新出の中世木割書に関する研究では、新出の木割書を学界に向けて紹介するとともに、全文を翻刻し内容を読解し、数少ない中世の木割書であると論じることを試みた。

新出の古文書には表題があり、「とりいのミやうもく」（以後は「とりいのみょうもく」と記す）と記載されている。また、文章は主に前半と後半で内容が異なり、前半には元龜 3 年（1572）の年号と共に木割に関する文章が、後半には応永 26 年（1419）の年号と共に棟札に関する文章が、それぞれ記載されている。木割の部分の前半に鳥居の木割があり、後半は大工や技術の由緒となっている。

全 10 箇条からなる前半の文章は、初めの 8 箇条で木割を、残りの 2 箇条で由来を、それぞれ記している。最後には「右筆什慶在判 元龜三年壬申卯月朔日 持主僧津左京進」の文言があり、文書が作成された年号と共に、筆写した者と所有した者が明記されている。

木割の文章には、「かゝい（＝比例を意味する用語）」や「木のミ（＝島木を意味する用語）」や「木くだき（＝木割を意味する用語）」など、中世から近世に掛けて使用されていた古風な言葉が見られる。また、「とりいのみょうもく」という表題にある「名目」の言葉も近世の多くの木割書とは異なる。

木割の文章は、「一ちやうの物に八、はしらのせいーしやくなり」から始まる。柱径を規定するための前提条件として柱間に言及している。意味するところは、柱間が一丈の鳥居は、柱の径を一尺にする、という内容である。つまり、柱径は柱間の十分の一にする、ということに等しい。木割の体系は、各部分の相互に設定された比例という関係性の連鎖により成立する。柱にまつわる寸法には主に二種類が考えられ、一つは柱間の寸法、一つは柱径の寸法である。「とりいのみょうもく」では、柱間を規定する文章は記述されていないことになる。一方で、実寸を意味する言葉が用いられており、比例の表現にはなっていない。初期的な木割の特徴の一つである。

柱径は連鎖する比例関係の出発点になることが多い。柱径に比例係数を乗じて他の部材の寸法が導き出される。「とりいのみょうもく」では、「一ちやうの物に八、はしらのせいーしやくなり」と規定される。具体的な数値で「一尺」という寸法が提示されている。一方で、意味するところは「柱径は柱間の十分の一にする」に等しく、比例の要素が看取される。つまり、柱径の規定方法は、柱間と同じように具体的な寸法から抽象的な概念として、変化していったことが窺われる。

「とりいのみょうもく」では、主柱を規定する中で「一丈」や「一寸」という抽象度の高い数が用いられ、かつ比例関係を意味した文章にもなっていた。つまり、具象（中世的）から抽象（近世的）という変化にあって、過渡的な状態に位置付けられると判断できるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 山岸吉弘	4. 巻 88
2. 論文標題 中世陸奥国南部における大工技術の継承と蓄積	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本建築学会計画系論文集	6. 最初と最後の頁 3076～3082
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3130/aija.88.3076	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山岸吉弘
2. 発表標題 「とりいのみょうもく」の木割に見られる主柱と袖柱の規定
3. 学会等名 2022年度日本建築学会大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山岸吉弘
2. 発表標題 中世木割書にみられる鳥居の木割
3. 学会等名 2021年度日本建築学会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山岸吉弘
2. 発表標題 福島県内における中世の大工
3. 学会等名 2020年度日本建築学会大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------